

## コラム

# CNCP通信における「コラム」について考える

(特非)シビルNPO連携プラットフォーム 法人正会員  
(特非)温故創新の会 事務局長  
大野 博久



最近、急激に視力が低下し、紙面にびっしり書かれた記事を読むのが少し億劫になってきた。CNCP通信の読者の年齢分布は分からないが、同じような心境の方もおられると思う。

CNCP通信は、平成26年5月に発刊された第1号が、今では第16号を数え、内容は巻頭言、コラム、トピックス、会員紹介、会員からの投稿、部門活動紹介、イベント案内など多彩なコーナーで構成されている。各コーナーはお互いが役割を分担しながら、「CNCP通信」に期待される情報公開、啓発活動、広報・宣伝、協力・連携の呼びかけなどを担っている。

そんな中、トピックス、会員紹介、部門活動紹介、イベント案内などは、コーナー名で内容が特定されるため、執筆者と読者間の意思の不具合は少ない。しかし、「巻頭言」と「コラム」、「コラム」と「会員からの投稿」は、何となく違いが解りにくい。

「巻頭言」は運営者の立場から、「会員からの投稿」は会員の立場から書かれる。一方「コラム」は、雑誌によって立場を固定しないこともある。執筆者の自由度が高いと、執筆者の立場によって内容が「巻頭言」や「会員からの投稿」と類似しやすくなる。それは致し方ないことだが、「コラム」には独自のステータスがあってもよい。

「コラム」への執筆を依頼されたとき、真っ先に『朝日新聞』の「天声人語」や『日経』の「春秋」が頭に浮かんだ。囲い枠付きの少ない文字数で、センスの良いコラムニストが歯切れよく書くものである。日常の変化を観察し、それを政治・経済・社会・技術などに転換して切り込むものでもある。

過去の「コラム」への執筆物を通観した感想では、結構専門性が強く、重厚で、技術的な価値の高いものが多く含まれている。もちろんコラムとはいえ内容や書き方は執筆者の自由、また様々な視点があって構わない。だが、企画・運営者の構成意図がどこにあるかは知りたい。

もし決まりがないのであれば、企画・運営者に「コラム」執筆のゆるい定義をして貰うと、執筆者と読者の間に基本的な視点の一致が生まれ、期待感が高まる。例えば原稿の目安を800~1000字程度に抑え、話題の提示、話題から見える課題、その課題の原因や背景、そして今後に向けての自分の考えなどを簡潔に含めるようにでもすれば興味を持ってもらえそうだ。

このようなコラムなら、視力が低下した高齢者でもそれほど苦もなく、楽しんで読める。もし、文才に恵まれ、常に花鳥風月を考えている人が執筆された場合には、趣の深い「コラム」欄になるような気がする。